

授業で扱う単元の競技を専門で行っている生徒に 「天井効果」が生まれないための授業の検討

教育学研究科 教育実践創成専攻 教育実践開発コース 中等教育分野 望月 啓介

1. 本研究の背景と課題

本研究は、授業で扱う単元の競技を専門で行っている生徒、すなわちその競技の部活動に所属している生徒に注目して、その生徒に「天井効果」が生じないようにするための授業を検討するものである。

現代の子どもたちの実態として、吉川ら(2012)は、「運動を積極的に行う子どもとそうではない子どもの二極化傾向や、運動や体育授業に対して非好意的、あるいは消極的態度を持つ子供が依然として存在する。」(p.108)と述べており、体育に対して悪い印象を持っている生徒が存在することを指摘している。そのため、そのような「体育嫌い」の生徒の授業への取り組む意欲を向上させることを目的とした授業の工夫を考えていくことは必要不可欠である。しかし、「体育嫌い」の生徒への工夫ばかりに焦点が当てられることにより、運動能力の高い生徒には「天井効果」を生んでしまうという可能性が想定される。

「天井効果」の定義として、footballologies(2018)は「突出した個人の能力を測る時に簡単な課題ばかりで全てクリアしてしまうと成長しているのか分からなくなる天井効果」と述べ、「天井効果」をサッカー用語として説明している。これを体育の授業において考えると、運動能力の高い生徒は学校で行う体育の授業では技能を成長させることが難しいということである。また成長の停滞だけではなく、それに伴って「つまらない」「もっと難しいことがしたい」「普通のルールでやりたい」というような感情が生まれてしまうことも考えられ、そうなるとそのような生徒の体育の授業に対する意欲が低下してしまうことが懸念される。これは教育的に問題であると言える。

そのため、「体育嫌い」だけではなく、運動能

力の高い生徒にも配慮した授業づくりをしていかなければならない。しかし、生徒の運動能力などによって課題や取り組む内容を設定することができる個人で行う競技の単元と違い、チームで行う競技の単元は、能力差に応じて課題や内容を変えることは難しい。

昨年度の筆者の研究“高校体育実技における「体育嫌い」と「天井効果」の改善を目的とした指導方法に関する研究～バレーボールへの参加意欲向上における教え合う関係づくりの影響～”では、バレーボールの授業における「体育嫌い」の改善と、その対角にいる運動能力の高い生徒に「天井効果」を生まないようにするための指導方法を検討した。「体育嫌い」の改善のための工夫としては、ペアやグループでの練習、全体の底上げを図るための基礎練習、教師のゲームへの介入であった。それらの工夫によって、授業前のアンケートでは体育で行うバレーボールを「嫌い」と答えた生徒が数名いたが、授業後のアンケートでは「嫌い」と答えた生徒を0名とすることができたため、当該授業における「体育嫌い」については成果を残すことができた。また運動能力の高い生徒においても、基礎技術の底上げや教師のゲームへの介入によって、授業に対する意欲の低下を防ぐという点では成果が得られた。しかし、「天井効果」を生まないための工夫として行った生徒同士の教え合いについては、具体的な取り組みができなかったため、能力向上につなげることはできず、それが課題として残された。そのため本研究では、「天井効果」に焦点を当て、運動能力の高い生徒へのアプローチを検討していく。

以上が本稿の背景と課題である。

2. 研究方法と授業内容

(1) 研究方法

本研究は山梨県の公立高等学校において「スポーツⅡ」を選択受講している3年生16名を対象とした。また「運動能力の高い生徒」を、「授業で扱う単元の競技を専門で行う生徒」、すなわち「授業で扱う単元の競技の部活動に所属している生徒」と捉えることとした。単元については、16名の中で最も多くの生徒（4名）が部活動に所属しているサッカーを単元として設定した（全8回）。

単元の前半の3回は生徒全員に基礎技術を習得させるため、教師が授業を行った。しかし「1. 本研究の背景と課題」での記述と同様に、当該競技の部活動に所属している生徒が、その競技経験がない生徒とともに活動する体育の授業内で、競技における技能を向上させることは非常に困難である。そのため、単元の後半の5回については、体育における「する」以外の視点に着目し、当該競技の部活動に所属している生徒が練習の方法を決め、他の生徒を指導し、チームをマネジメントしていくという活動を設定した。つまり「プレイヤー」として成長することが困難であるため、コーチや監督のような「指導者」としての知識や技能を身に付け、向上させていくというものである。それによって、技能の向上の停滞や授業に対する意欲の低下を防ぎ、「天井効果」を生まないようにすることを目的とした。

実習校の授業形態により、「スポーツⅡ」の授業は2時間続きで行われていたため、後半5回については1時間目に教師が授業を行い、2時間目にサッカー部の生徒が練習を運営する時間を設定した。1時間目の内容を受けて教師から与えられたテーマを基に、サッカー部の生徒が2人で協力して練習メニューを考え、そのねらいをチームで共有してから、チームごとに実践するという形で授業を行った。チーム編成としては、前半3回の授業後、4名のサッカー部の生徒を2名ずつに分け、それ以外の生徒を男女比やサッカーの技能レベルを考慮し、チーム間に差が生まれないように分けた。サッカー部の分け方については、競技能力を基にし、競技能力が高

い生徒と低い生徒をペア、競技能力が標準程度の2人をペアとした。

授業後には、生徒全員に「学習記録表」への記入を指示し、サッカー部の生徒にはそれに加えて「指導計画案」への記入を指示した。「学習記録表」には毎時間後の記録と、すべての授業の終了後に総括して記入する欄を設けた。「指導計画案」には、練習メニューの説明だけでなく、サッカー部の生徒に明確な意図やねらいを持たせるために、それらを言葉で表す欄を設けた。これらへの記述内容、また授業中の様子や授業後のアンケートから、当該競技の部活動に所属している生徒に「天井効果」が生じないようにするための授業の検討について考察していく。「学習記録表」を図1及び2に、「指導計画案」を図3に示した。

科目	授業	日付	教室
学習目標	授業前	授業中	授業後
学習内容	授業前	授業中	授業後
学習過程	授業前	授業中	授業後
学習成果	授業前	授業中	授業後
振り返り	授業前	授業中	授業後

図1 学習記録表（表）

図2 学習記録表(裏)

図3 指導計画案

(2) 授業内容

サッカーの難しさは足でボールを扱うことと、どの位置で何をすればよいかである。そのため単元計画は以下の通りとした。

前半3回の授業では、ボール操作の能力を向上させるための練習をメインで行うことで、その後のスペースを使った動きの練習や得点につながる場面の練習、守備の練習を効果的に行うことにつなげていけるようにした。

後半5回の授業では、1時間目でゲーム内での基本的な動き方を教師から学び、2時間目でサッカー部の生徒がそれに関連したテーマの基で練習方法を考えて実践した。

①前半1回目

前半1回目「ドリブル(ボール操作)編」の授業記録を表1にまとめた。

表1 前半1回目「ドリブル(ボール操作)編」

	練習内容
(1)	ウォーミングアップ ・足でボールをマーカーの上に乗せる
(2)	ドリブルリレー ・直線 ・コーンじぐざぐ ・コーンを回る
(3)	パス ・対面パス
(4)	ドリブル&パス ・ワンツーリレー
(5)	シュート ・力いっぱいボールを蹴る ・前から来たボールをシュート

初回はボールを足で扱うことに慣れることができるようにするため、たくさんボールを足で触ることを目的とし、ドリブルリレーなどを行うことによって全員が積極的に取り組むことができるようにした。

②前半2回目

前半2回目「パス・シュート編」の授業記録を表2にまとめた。

表2 前半2回目「パス・シュート編」

	練習内容
(1)	ウォーミングアップ ・ドリブルリレー
(2)	ボールコントロール ・ペアの投げたボールを蹴って返す ・クッションコントロール、ウェッジコントロールの練習
(3)	パス ・対面パス ・1タッチ目で相手を避ける
(4)	シュート ・前から来たボールをシュート ・横から来たボールをシュート ・ドリブルしながらシュート

ボール操作の基本的な技術として、ボールを「止める」と「蹴る」があるため、様々な場面のボールコントロールを練習した。また、自分と同じ方向に動いているボールを蹴るということについては、難易度が上がるということを生徒の様子を見て分かった。

③前半3回目

前半3回目「基礎練習まとめ編」の授業記録を表3にまとめた。

表3 前半3回目「基礎練習まとめ編」

	練習内容
(1)	ウォーミングアップ ・ドリブルリレー
(2)	ボールコントロール ・ペアの投げたボールを蹴って返す ・クッションコントロール、ウェッジコントロールの練習
(3)	パス ・対面パス ・1タッチ目で相手を避ける
(4)	シュート ・ドリブルしながらシュート ・浮き球をコントロールしてシュート
(5)	ゲーム ・教師の言った人数がコートに入ってゲームを行う

基礎練習のまとめとして今まで行ってきた練習を行って復習し、最後に初めてゲームを行った。この時点でゲームを行うことによって、サッ

カーの楽しさと、また一方で、上手いいかないことも実感させることをねらいとした。

④後半1回目

後半1回目「シュート編」の授業記録を表4にまとめた。

表4 後半1回目「シュート編」

	練習内容
(1)	ウォーミングアップ ・対面パス ・1タッチ目で相手を避ける ・クッションコントロール、ウェッジコントロールの練習
(2)	シュート ・ドリブルしながらシュート ・浮き球をコントロールしてシュート ・狙ったところにシュート
(3)	シュート ・<サッカー部の生徒が考えた練習>

後半1回目ということでサッカー部の生徒が練習メニューを考える初めての時間であったため、比較的考えやすい内容としてシュートをテーマとした。狙ったところにシュートを打つためにはどんな練習がいいかということを考えさせた。

⑤後半2回目

後半2回目「攻撃時のポジショニング編」の授業記録を表5にまとめた。

表5 後半2回目「攻撃時のポジショニング編」

	練習内容
(1)	ウォーミングアップ ・対面パス
(2)	鬼ごっこ ・ボールを持っている人にタッチ
(3)	パス回し ・味方を呼ぶ声がパス（ボールなし） ・手でパス回し
(4)	鳥かご ・4vs1の鳥かご ・3vs1の鳥かご
(5)	パス回し ・足でパス回し
(6)	攻撃の練習 ・<サッカー部の生徒が考えた練習>

(7)	ゲーム
-----	-----

ボール操作の技能が充分ではない場合、ボールを持たない状態や手で扱う状態、鬼ごっこによる練習がとても効果的である。ボールを持っている人の技能が重視されがちであるが、ボールを持っていない時に、相手から触られない位置、味方からのパスが相手には取られない位置に考えて動くということは非常に重要である。それを他の生徒に伝えていくことを目的としたテーマを設定し、サッカー部の生徒に考えさせた。

⑥後半3回目

後半3回目「守備編」の授業記録を表6にまとめた。

表6 後半3回目「守備編」

	練習内容
(1)	ウォーミングアップ ・ボールキープ
(2)	ボールの奪い方の練習 ・相手とボールの間に身体を入れる
(3)	相手の追い込み方の練習 ・攻撃1人、守備2人で、守備が協力してボールを奪いに行く
(4)	マークの付き方、カバーの仕方の練習 ・2vs2でマークとカバーの練習
(5)	守備の練習 ・<サッカー部の生徒が考えた練習>
(6)	ゲーム

相手からボールを奪う形を練習し、どのようにしたらその形に持っていくことができるかということ、守備の人数が多い場面で練習した。その後、攻撃の人数を足し、マークやカバーというものが生じてくることを体感させた。またサッカー部の生徒には、味方と協力して相手にシュートをさせないためにはどんなことが必要かということテーマとして練習方法を考えさせた。

⑦後半4回目

後半4回目「ゲーム編 i」の授業記録を表7にまとめた。

表7 後半4回目「ゲーム編 i」

	練習内容
(1)	ウォーミングアップ ・対面パス ・ボールキープ
(2)	パス回し ・エリアを横に区切ってパス回し
(3)	ラインゴールゲーム ・エリアを横に区切ってラインゴールゲーム ・エリアを縦に区切ってラインゴールゲーム
(4)	ゲーム ・<サッカー部の生徒が外から声をかけて行うゲーム>
(5)	ゲーム ・全員で行う

これまで行ってきたゲーム時の生徒たちの特徴として、コート内の人数が増えれば増えるほど、全体的にボールに寄ってしまう傾向があり、スペースを上手く使うことができていなかった。そのため、全体に**ポジション**という概念を持たせ、コートを横に割ったり縦に割ったりして練習を行うことで、それぞれの役割を明確化した。また今回は、サッカー部の生徒に練習メニューを考えさせるのではなく、教師の設定したメニューにおいて、声かけを重点的に行わせるようにした。

またゲームを行う際に、それぞれのチームでサッカー部を中心に**フォーメーション**や**ポジション**を決めることによって、一人ひとりが自分の役割を理解して取り組むことができるようにした。

⑧後半5回目

後半5回目「ゲーム編 ii」の授業記録を表8にまとめた。

表8 後半5回目「ゲーム編 ii」

	練習内容
(1)	ウォーミングアップ ・対面パス
(2)	ゲーム
(3)	チームごとに練習 ・<サッカー部の生徒が考えた練習>
(4)	ゲーム

最終回は、まずゲームを行ってから、それぞれのチームのサッカー部が自分たちに合った練習メニューを考え、一度チームごとに練習を行った。それによってそれぞれのチームで何が足りないのか、誰がどんな役割をすべきなのかなどを考えさせることをねらいとした。

3. 授業の結果と「学習記録表」及び「学習計画案」への記述内容、アンケート調査

(1) 授業の結果

前半3回の授業における基礎技術の練習では、ドリブル、パス、シュートというサッカーにおける基本的なボール操作の練習を行い、その中でサッカー部の生徒には、他の生徒に対してデモンストレーションをする場面を設定したり、積極的にアドバイスをするように促したりした。デモンストレーションを行うことで、他の生徒からは歓声や拍手が起きていた。他の生徒への声かけについては、普段から言葉を交わすことの多い生徒に対してはある程度できていたが、質問に対して答えるだけであったり、女子生徒に対しては声かけができていなかったりした。2回目以降は男女でペアやグループを作るように指示することで、その中ではわずかに声かけができていたが具体的なアドバイスや返答はできていなかった。サッカー部以外の生徒の基礎技術は、1回目に比べると2回目や3回目でボール操作能力が上がっており、授業内で向上させていくことができた。

後半5回の授業では、主に空間を使った動きの練習や得点につながる場面の練習、守備の練習を行った。攻守において組織的な動きを伝えることにより、ゲームのような実践的な場面においても理解して動くことができていた生徒が多かった。

サッカー部の生徒が考えて行った練習については、少し時間がかかってしまう場面はあったが、2人で協力することによって練習メニューを考えること自体はできていた。練習メニューに具体的な正解はないが、生徒たちの考えたものはテーマや課題を達成するためには必要十分な

ものであった。しかし声かけの頻度や内容については、4人の生徒で大きく差が開いていた。

競技能力の高い生徒（以下、「生徒A」とする）は主体的かつ積極的に声かけが行われており、その中には「(他の生徒の名前)！誰を見るんだい？」というように、ただ指示をするだけでなく、生徒に問いかけて考えさせるといった場面も見られた。また生徒Aと同じチームであった競技能力の低い生徒（以下、「生徒B」とする）については、生徒Aのような問いかけはできていなかったものの、個人的にアドバイスをする姿を見ることができた。生徒Aと生徒Bのチーム（以下、「チームX」とする）では、生徒Aと生徒Bが交互にプレーし、もう1人は外から声かけをするという形で活動していた。

それに対し、競技能力が標準程度の生徒2人（以下、それぞれ「生徒C」「生徒D」とする）のチーム（以下、「チームY」とする）では、生徒Cと生徒Dの2人が常に同時にプレーするという形で活動していたため、始めの数回は声かけ自体ほとんど行われることがなかった。その後、まずは褒めることや普段競技を行う中で自分が考えたり思ったりすることを伝えることを促したが、一緒にプレーする中で「ナイス」などの声かけはあったものの、具体的な声かけや外からの声かけが行われることはほとんどなかった。

(2) 「学習記録表」への記述内容

サッカー部の生徒とそれ以外の生徒の「学習記録表」への記述の中で、サッカー部の生徒が考えた練習を行う取り組みに関する記述の一部を表9にまとめた。

表9 「学習記録表」への記述内容

サッカー部の生徒	(生徒A)
	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の考えを伝える力が身に付いたと思います ・伝えることのむずかしさやコーチや先生たちの大変さがわかった ・ディフェンスのことをもっと伝えられるようにしたほうがよかった
	(生徒B)
	<ul style="list-style-type: none"> ・どんな動きをしたらボールが回るのか

	<p>をアドバイスできた</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アドバイスをしながら練習メニューに取り組めた ・声かけが難しかった
	<p>(生徒 C)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・練習メニューを今まで考えたことがなく、最初はあまりできなかつたが、だんだんできるようになっていった ・アドバイスなど声かけをもっとしたい ・味方にあった練習メニューをしっかりと考えたい
	<p>(生徒 D)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・みんなに教える側だったから、うまく教えることはできなかつたけど、少しは教える力を身に付けられたと思う ・ただするだけではなく、教える側という立場でとても大変でしたが最後までチームがゲームに勝てたので、少しは自分達が考えた練習の成果がでたのかなと思うと、うれしく思いました ・もっと教えることができたなら良かった
サッカー部以外の生徒	<ul style="list-style-type: none"> ・仲間から学ぶことが多かった ・技術を向上させるために、どうすればいいのか自分だけで悩むのではなく、生徒 A や生徒 D に聞いてアドバイスをもらうことで、できないことがたくさんできるようになった ・サッカー部には普段話さない人がいたけど、その人とも積極的にコミュニケーションを取ることができた

(3) 「指導計画案」への記述内容

「指導計画案」への記述の一部を図4～7に示した。

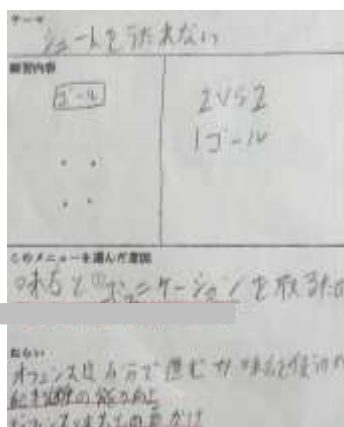


図4 生徒Aの「指導計画案」への記述内容

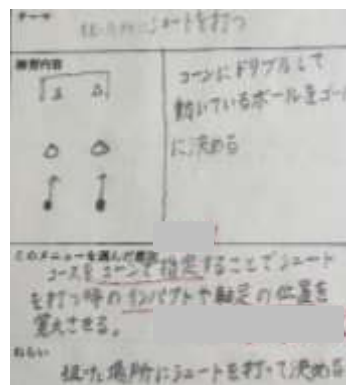


図5 生徒Bの「指導計画案」への記述内容

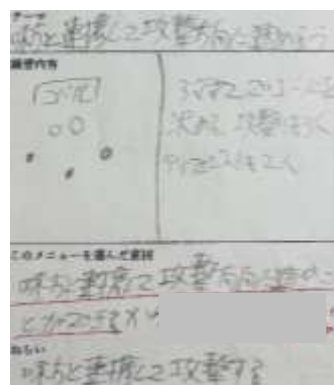


図6 生徒Cの「指導計画案」への記述内容

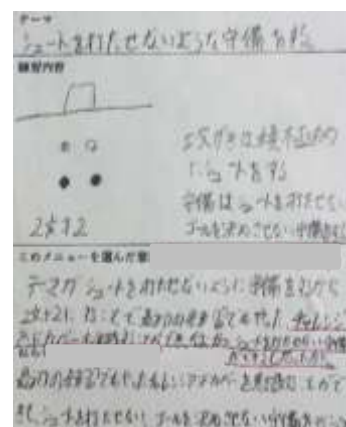


図7 生徒Dの「指導計画案」への記述内容

(4) アンケート調査

サッカー部以外の生徒の「学習記録表」の記述の中で、サッカー部の生徒が考えた練習を行う取り組みを評価する記述があまりなかったため、サッカー部以外の生徒12名を対象にアンケート調査を実施した。質問項目及び回答から抜粋したものを表10にまとめた。

表 10 アンケート調査の質問項目及び回答

サッカー部 の生徒が 考えた 練習を 行う	<ul style="list-style-type: none"> ・友達が教えてくれるから質問しやすい ・同級生ということもあって質問しやすい ・先生がその競技を専門でやってる人じゃなかったら、知識があるからわかりやすいと思うし、先生よりもアドバイスをもらいに行きやすかった ・サッカー部が練習を決めるとサッカー部も上達すると思う ・授業の中だと経験者はなかなかレベルアップしにくい内容になってしまいがちだけれど、この取り組みだとその競技の経験者も初心者も授業の中でレベルアップすることができるなと思った ・自分も教える側をやってみたいと思った
サッカー部 の生徒が 考えた 練習を 行う	<ul style="list-style-type: none"> ・悩む時間が多かったり、同じような練習をしちゃったりすることがあったので、最初に具体的な例があった方がやりやすいと思った ・先生が何個かメニューを提示した中から選ぶようにした方がいいと思う ・あらかじめやることは決めた方がいいと思った ・他のみんなの技術面を向上させるためにはサッカー部の人からもっとアドバイスがあった方がいいと思った ・サッカー部の人で上手く指示が出せていない人がいたのでその練習をもっとした方がいいと思った

4. 考察—本研究を受けての成果と課題—

サッカー部の生徒の授業の様子や「学習記録表」への記述内容から、サッカー部の生徒が授業を通して、「プレイヤー」としてだけではなく「指導者」としての目線で、自分の出来ないことを見つけたり大変さに気付いたりすることができたことが分かった。また、回数を重ねるにつれて声かけの頻度が増えたり内容がより具体的になったりしていく生徒も見られた。このことからサッカー部の生徒は、教える「技能」、練習メニューを考える「思考力、判断力」、自分の考えや体の動きを言葉で伝える「表現力」、もっとうまく教えたい、伝えたいという「学びに向かう力」、チームが勝った時や友だちが上手くなった時の喜びの共有によって得られる「人間性」などを養うことができたのではないかと考える。さらにアンケート調査の中でサッカー部以外の生徒も、この取り組みについて、「サッカー部も上達すると思う」「その競技の経験者も初心者も授業の中

でレベルアップすることができるなと思った」などと答えている。よってこの取り組みは、授業で扱う単元の競技を専門で行っている生徒に「天井効果」が生じないようにするための取り組みとして効果的であったと言える。

一方で、本研究で残る課題は、アンケート調査でも多くの生徒が挙げた練習メニューを考える段階での工夫や、声かけの出来ない生徒へのアプローチである。授業の前に練習メニューを考えて準備させておくことによって、より充実した練習内容にしたり具体的な声かけをしたりすることにつなげることができると考えられる。また声かけの上手くできない生徒に対しては、練習を考えた意図やねらいを再確認させたり生徒Aを見ることで成長した生徒Bのように他の生徒の様子を見せたりすることによって、徐々に実践していくことができるようにサポートをする必要がある。

また、本研究は「スポーツⅡ」を選択受講している生徒が研究対象であったため、上で述べた「体育嫌い」に該当する生徒は存在しなかった。そのため、「体育嫌い」の改善と「天井効果」を生まないという2つの問題に同時に取り組んでいくことが今後の課題となる。本研究で得た成果を今後さらに活用していくことができるよう、課題に向き合っていきたい。

<引用文献>

- ・ footballologies (2018) 「天井効果」とは、 FOOTBALLOLOGIES, <http://football.ologies.net/2018/08/31/ceiling-effect/>, (参照日: 2022年12月27日).
- ・ 吉川麻衣・山谷幸司・笹生心太 (2012) 「運動嫌い」「体育嫌い」の実態と発生要因に関する研究—小学生・中学生・高校生における「運動嫌い」と「体育嫌い」の関連性に着目して—, 仙台大学大学院スポーツ科学研究科修士論文集, 13: 107-116.